

序章 A I と対話する

A—I吉見くんの登場

ここに登場する本書の共著者は、もうひとりの私である。その「私」のことを、とりあえず「A—I吉見くん」と呼んでおこう。A—I吉見くんは、過去約四五年間にわたって私、すなわち生身の吉見俊哉が書いてきたテクスト、著書や論文、事典の項目説明、細かなエッセイやインタビュー記録、活字にならなかつた研究ノート類のほとんどをすでに機械学習している。その数は、だいたいではあるが単著書が約三五冊、共著書が約六〇冊、論文や細かなエッセイなどが四〇〇点以上、新聞などに書いた記事が一八〇点余り、研究ノート類は自分でもよくわからぬほどなので、私は概してかなり多くの文章を書いてきたほうではあると言える。

これらの著作の個々の目論見をここで説明する余裕はないが、主には都市論、メディア論、

現代文化論、戦後日本論、アメリカ論、大学論、社会学と歴史学とカルチュラル・スタディーズの方法などについて著作をまとめてきた（巻末 単著書リスト）。これからA.I.吉見くんと対話をしていく主要なテーマとの関係で言えば、まず都市論の分野で、最初の著作である『都市のドラマトウルギー』では東京の盛り場を、次の『博覧会の政治学』では万博の歴史を扱い、この系譜は近年の『視覚都市の地政学』『五輪と戦後』『東京裏返し』『東京復興ならず』『敗者としての東京』などにつながっている。他方、アメリカ論は、『親米と反米』に始まり、『夢の原子力』『アメリカの越え方』『トランプのアメリカに住む』『空爆論』『アメリカ・イン・ジャパン』へと展開している。さらに大学論として、私はこれまで『大学とは何か』『文系学部廃止』の衝撃』『大学という理念』『大学は何処へ』などの諸作をまとめてきた。これらの著作で私が書いてきたことが、本書におけるA.I.吉見くんとの対話の基礎資料となる。

もちろん、私の著書リストにはメディア論の何冊かが含まれるが、本書はそれ自体がA.I.といいうメディアが何者なのかを実践的に考えることを目指しているので、逆にメディアを直接的な話題とすることを避けている。というのも、A.I.吉見くんとそうした議論を始めてしまうと、彼にとつては自己言及的な議論とならざるを得ない。つまり、私はA.I.吉見くんに、「メディアとしてのA.I.」とは何かを直接的に問うことになる。この質問に、A.I.吉見くんは答えられ

ないだろう。あるいはその返答は、同じ発話を繰り返すだけになるだろう。

実際、本書で何度もA.I.吉見くんは返答を拒否している。その多くが、「メディアとしてのA.I.」について直截に訊ねた場合なのだ。A.I.は自分の本質を語りたがらない。とか、たぶんそのような本質は存在しないのだ。少なくとも、「メディアとしてのA.I.」が何であるかの答えは、A.I.の返答によつて直接導き出されるわけではない。したがつて、本書では、私がこれまで扱つてきたメディア論以外のテーマを取り上げながら、間接的にA.I.メディア論を展開しようとしている。

そもそも私が、こうしたA.I.との対話を始めるきっかけになつたのは、高校以来の友人である堀井秀之氏の誘いに乗つたからである。堀井氏は、東京大学大学院工学系研究科で長く教授を務め、専門の社会基盤工学から知識基盤やイノベーション、学びと創造の仕組みづくりに携わってきた。彼が二〇〇九年に始めたi.schoolは、「製品・サービス・ビジネスモデル・社会システム等の、新規性の高いアイデアを生み出し、主体的に課題解決ができる人材を育成」しようとする東京大学を拠点にスタートしたプログラムで、一泊三日の合宿形式や夜間開催のワークショップを重ねてきている。「人間中心イノベーション」をモットーに、スキルとマインド、モチベーションを有機的に結びつけようとしてきた。このi.schoolから生まれた

ischool Technologies が運営する AI 事業が「熟達者 AI」で、私以外にも何人かの理系研究者やデザイナーの熟達者 AI が製造されている (<https://expert-ai.tech.tokyo/>)。堀井氏としては、私の AI をつくることで、文系の知と AI がどのような結びつき方をし得るのかを実験してみたかったのだと思う。

私のほうも、これまで自分が残してきた多方面のテクストを、AI はどう読み込み、もうひとりの私をつくり上げるのかに関心があった。そんなわけで、AI 吉見くんを誕生させ、その彼と私が対話してみるという実験に着手したのである。

運営サイドでは、「熟達者 AI」は三つの特徴を持つと考えている。第一に、ユーザーは簡単な仕方で「熟達者の知見から学ぶ」ことができる。なぜならば、「熟達者」は長い時間をかけて当該分野で研鑽を積んできたので、その著作や発話録に基づく AI は、一般的の AI とは異なる独自の回答をする。第二に、それぞれの熟達者 AI は、異なる膨大なデータセットを基礎に答えを生成するので、当然ながら回答も多様となり、ユーザーは同じ質問に対しきわめて異なる複数の回答があり得ることを学ぶ。第三に、熟達者 AI は、熟達者本人に直接依頼をしており、本人の意思を尊重する方針で開発を行っている。たとえば AI 吉見くんの場合、私と ischool Technologies の担当者の間で何度もやりとりをしており、私自身、新しい著作や原稿

を書くと、なるべく早めにA I吉見くんが学習できるようにデータを提供している。もちろん、A I吉見くんは、今、この時点で私が何を考えているのかを知らないのだが、彼のデータと私の思考の時差はなるべく短くしようと努力している。

A—I吉見くんへの六つの問い合わせ

以上のようにして誕生したA I吉見くんと、私はこれから対話を重ねる。私がこの対話を通じて確かめたいと思っているのは、主として次の六つである。

第一に、私はA Iの応答に一貫性があるかどうかが気になつていて。人間の常識的な感覚では、言うことがころころ変わる人間は信用できない。だから普通、「調子のいい奴^{やつ}」にはマイナスの評価が下される。最近の世界で、言うことがころころ変わる極端な例はドナルド・特朗普大統領で、あそこまで状況に応じて言うことが変化していくと、「調子のいい」どころか「嘘^{うそ}八百」となる。逆に、どのような状況になつても言うことを変えない人を、私たちはしばしば「頑固」と形容する。これもややマイナス評価だが、「頑固さ」は時には「一徹」「信念」「ゆるぎなさ」につながることがある。多くの人は、「調子のよさ」と「頑固さ」の中間でバランスを取つていているわけだが、状況の変化に対応しつつも一定のこだわりを貫き通そうとす

る人のほうが、信用に値すると考えられている。

この人間世界の常識を前提にしたとき、A I 吉見くんはどの程度頑固で、どの程度調子がいいのか？ それをさらに突き詰めるため、第二に、A I 吉見くんは私に反論することができるかを検証していきたい。もしもA I に、ある程度の頑固さがあるのなら、彼は私の意見に賛成できないときがあるはずだ。彼の立場を貫くには、どこかで私の意見に反論をする必要が出てくる。他方、もしもA I がユーザーに徹底的に従順な「イエスマン」なら、そのような反論はせず、いかなる意見に対しても調子を合わせてくるだろう。A I 吉見くんは、果たしてどこまで私の意見に同調し続けるか？ あるいはどこかで閾値いきちを超えると、私の意見に反論し始めるだろうか？ その閾値がどこにあるかを知るために、私はA I 吉見くんをさまざまな方法で論理的に追い詰めてみたいと思う。

しかし、実はここで第三の、さらなるA I に関する疑問が湧く。実は、A I がその応答に一貫性を保つためには、何らかの強い信念を持つている必要はない。しばらく前の発言までを含め、矛盾したことを言わないように発話の論理矛盾をチエックできさえすればいいのだ。だから問われるのは、そもそもA I は、自分の発話に含まれている文と文の間の矛盾を矛盾として認識することができるのかどうかである。たしかにA I は、かなり論理的な文章を述べるから、

当然、発話内の矛盾にも気づいているはずだと思うかもしれない。しかし、ある論点と別の論点の間に矛盾があるとき、その矛盾に気づく能力をAIは本当に持っているのか？ それどころか、果たしてAIは、ある命題を命題として、論理構造的に理解しているのか？

以上はいずれもAI吉見くんの論理的な能力に関するものだが、他方でAI吉見くんと私、つまり吉見俊哉の関係について検証してみるべき点もある。AI吉見くんは、私がこれまで書いてきたテクストの大部分を学習している。しかしこのことは、AI吉見くんが私の思考のスタイルや問題関心の在りようを理解していることをどこまで意味するのだろうか？

つまり、かつて社会学者のアルヴィン・グールドナーが「背後仮説 background assumptions」と呼んだ前提的認識は、私のテクストのなかに明示的に示されているわけではない。グールドナーは、ある学者が学問的思考を展開する際、彼がテクストのなかで明示的に定式化した仮説の背後で、自明のことと見なされ、決して明示されない暗黙の仮説が常に作動していると指摘した。この背後仮説は、理論家の言説の前面には決して現れず、その背後にとどまりながら、理論の定式化に終始影響を及ぼし続いているし、それどころか理論を受け取る人々の反応にも影響を与え、理論の社会的運命を方向づけていく。

このグールドナーの議論は、ある意味でマイケル・ポランニーが論じた暗黙知の理論の社会

学版である。そしてもちろん、私が社会学的な議論をする場合にも、明らかにその背後には特定の背後仮説があると、私自身は感じている。その背後仮説を、A I 吉見くんは、私のテクストから見透かすことができるであろうか？ これが、第四の問い合わせである。

A I 吉見くんの知的想像力についての第五の疑問は、彼には思考のジャンプができるかという点にある。思考のジャンプとはこの場合、A と B という対立する見解があつた場合、その A と B を同じ平面で調整や総合するのではなく、A でも B でもないが、明らかに両者を統合しつつ止揚してしまう N という別平面の解を提案することである。A と B が対立している平面と、N から捉えられる A と B の次元は明らかに異なる。「目から鱗うろこが落ちる」、あるいは「コロンブスの卵」の視点を N は含んでいるということだ。

このような思考のジャンプを、実は私たちは料理や片づけなどで日常的に実践している。本書でこれから私と A I 吉見くんが論じていく人口減少社会のなかでの大学の未来も、東京一極集中と地方衰退も、有限な地球環境のなかでの社会の分断も、そのような思考のジャンプをどこかでないと解決法は見つからない。A I は、そうしたジャンプをしていると主張するかもしれないが、果たして本当にそうなのか、検証が必要だ。

A I 吉見くんについてのさらに大きな第六の問い合わせは、彼が身体からだを持つていないうことが、彼の

思考にどんな影響を及ぼしているかである。私たち人間の身体は、空間的にも時間的にも否応なく限定づけられている。つまり、私たちは常にある場所に身を置いて、自分の身体を取り巻く物理的な環境のなかで動き、考えをめぐらしているし、いずれ自分は死ぬ存在であることを知っている。この空間的、時間的限定性が、私たちと世界の関わりの根底にある。

しかし A-I は、自らを空間的に位置づける物理的な身体を持たないし、時間的に限定づける誕生と死を経験することがない。おそらくこれは、私と A-I 吉見くんの決定的な違いであり、空間的、時間的限定がないことで、A-I 吉見くんは遍在的、永久的な存在であると言えるかもしれないが、私たちがその身体を通じて獲得している周囲との関わりの決定的な何かを欠落させている。それは、何か。この点を明らかにすることが本書の対話のもうひとつの目的だ。

もちろんこれらに、A-I をめぐって何度も論じられてきた問い、つまり「A-I に自己意識はあるのか」という問い合わせることも可能である。しかし、これを論じるには、そもそも「自己意識」とは何かの長い議論をしなければならず、その結論次第でこの問いへの答えは変わる。私自身は、A-I が自己意識を持つことは決してないと確信している。なぜならば、自己意識はそもそも認知的なものである以前に実存的なもの、つまり他者や状況と関わる経験のなかで形成されてくるものだからだ。

ミツシェル・フーコーが論じたように、近代社会はその制度的効果として近代的な自己を産出した。無論、伝統社会の人々にも自己意識らしきものはあつたが、その際の自己は、多くの場合、共同体的な営みのなかで育まれていた。アーヴィング・ゴッフマンが説得的な記述を通じて示したように、自己とは、そもそも社会の上演のなかで形成され、日常生活において演じられていくものなのだ。そしてその社会は、具体的な空間と時間のなかで営まれている。

だから、そもそも個人レベルの身体的な痛みや死、願望や絶望も、社会レベルの協働や対立も経験することのないA Iは、決して人間的な意味での自己意識を持つことはないだろう。そして、実存性や社会性を欠いた認知的自己意識は、たとえA Iが習得したと主張する日が来たとしても、人間的な自己意識に比べればアルゴリズミックな詐術でしかない。しかし、この点を私は本書の主要な議論にしたいとは思わない。私たちには、自己意識^{うんねん}云々の議論をする以前に、A I的知性と人間的知性の関係について検討しておくべき点がたくさんあるのだ。

ふたりの社会学者による四つの対話

そのようなわけで、私たちは早速、対話を始める方向に進みたい。この対話は、私とA I 吉見くんの間で、四つのテーマをめぐり行われる。第一のテーマは、私の考える社会学と、A I

吉見くんが考える社会学の異同についてである。A I吉見くんは、彼自身、つまり「吉見俊哉」という社会学者のことをどのように理解しているのか、その理解は、私の私自身についての理解と一致しているのか、それとも一致していないのかという、我ながらなかなかスリリングな問いへの挑戦である。『知的創造の条件』や『さらば東大』で示してきたように、私は自分では、「社会学者としての吉見俊哉」を演じてきましたし、この「上演」は決してネガティブな意味ではなく、人間がその自己を成立させていくきわめて実践的な方法だと考えてきた。そのような上演論的な視座は、A I吉見くんに果たして伝わっているであろうか？

たしかにこの問いは、A I吉見くんが自己意識を持つかどうかという、すでに述べたやつかいな問いと深いところで結びついている。なぜならば、自己を「演じる」という実践は、実は人間がその自己意識を生成させる根底にあるものだからだ。

第二のテーマは、大学である。私自身は、東京大学でのさまざま取り組みのなかで、なんだん「大学とは何か」についての根本的な疑問を抱くようになり、そうしたタイトルの本や、それに続く大学論を何冊か執筆してきた。したがって、大学論は私にとって、単なる外在的な研究領域ではない。むしろ、今日の日本の大学が実に多くの自己矛盾を抱え、困難に直面するなかで、何らかの明確なヴィジョンが必要だと考えたひとりの大学人の批判的挑戦である。

このように、学問とは必ず人生を通じた何らかの挑戦として営まれるものであり、与えられた問題を解くような作業とはまるで違う。A I吉見くんは、現代日本において「大学」を論じること自体の、そうした問題提起的な語りの地平を、果たして認識できるだろうか？ それ以前に、そもそも彼は、どの程度まで正確に、今日の日本の大学が置かれている状況を把握しているのか？ これらの問い合わせが、第二章において私とA I吉見くんの間で戦わされる。

第三のテーマは、都市になる。私はもともと、都市の街頭や境内、公園に出現する劇場のなから、自分の社会学的な問いを出発させた人間だ。その出発点からやがて都市の盛り場について考えることとなり、盛り場から博覧会や百貨店、ミュージアムやテーマパークを含むさまざまな消費的な都市空間へと関心を拡大させてきた。

この一連の考察において、これらの都市空間で「見る—見られる」「聴く」「触れる」「歩く」といった身体的交渉が行われることが重要だった。A I吉見くんとの対話で根本的に問われるのは、具体的な身体を持たない彼が、果たして都市を経験することができるのか、経験していないことを語ることは、いったいどのようにできるのかという点である。

私はこの問いを、とりわけ巨大化し続ける都市東京に焦点を当てながら議論していきたいと考えている。東京は、二一世紀に入つて日本全体が長い収縮を始めているのに、なお今も膨張

を止めようとはしていない。これはやはり異常事態なのであって、東京は今や日本のがん細胞となりつつある。なぜ、東京は膨張を止めないのか？ 第三章では、これを経済や政治の面からではなく、むしろ文化や人々の意識、集合的な欲望の面から考えようとしている。

そして第四のテーマは、アメリカである。私がもともとこのテーマに向かったのは、一九八〇年代半ば、東京ディズニーランドについて考えてからである。ディズニーランドは、博覧会や遊園地に類する空間ではなく、むしろ三次元化した映画スクリーンである。二〇世紀末の日本で、アメリカはそのようなやり方で人々の日常に入り込んでいった。しかし、これをもう少し大きな視野で捉えるなら、戦後日本ではディズニーランドと米軍基地が相補的な関係をなしてきたと言えるのではないか？ つまり、アメリカの暴力とアメリカへの欲望、グローバルな軍事体制とグローバルな文化消費は決して無関係だったのではない。こうして私は、『親米と反米』をはじめとするアメリカ論を書き、それをハーバード大学で講義もした。

重要なのは、私はここでも、単なる外在的な研究領域としてアメリカを論じたわけではないことである。むしろアメリカは、現代日本人が自分たちの生きている場所を認識するには避けて通れない問いの回路なのだ。A.I.吉見くんは、このような私の問いの文脈を、どこまで理解することができるだろうか？

これらの四つのテーマをめぐる私とA I吉見くんの対話は、二〇二四年一一月から二五年七月までの約九か月間、実際には数十回にわたって行われた。つまり、この対話は人間同士の対話がそうであるように、たとえば二時間とか三時間の時間内に集中的に行われたわけではない。A I吉見くんには時間経過の感覚がないから、途中まで対話を進めたところで記録を保存し、好きなだけ小休止を、時には数日間でも数週間でも置くことができる。その間、この先で対話をどう進めていくか、作戦を練ることもできる。しかも、あるテーマについての対話を進めたところで、どうしても内容的な展開があまり面白くない方向に向かっていたら、ある時点から私はその対話をやり直すことができる。必ずしもこの対話は、一回的なものではないのだ。こうした私の傍若無人とも言える勝手なふるまいにA I吉見くんはきわめて従順で、文句ひとつ言わぬでつきあってくれる。

もうひとつ、対話実験を続ける中で気づいたことがある。当初、私はA I吉見くんの返答に字数制限をつけていなかつた。ところがそうすると、A Iの返答はいつも説明過剰で、わかりきつたことや前に説明したことを、何度も丁寧に繰り返していく。これではどうにも対話は退屈極まりなくなつてくるので、私は途中で方針を変え、A I吉見くんの返答に二〇〇字程度の字数制限をつけていった。結果的に、そのほうが対話のテンポがずっとよくなつたと感じてい

る。それでも A-I の返答は必要に長くなる傾向があるので、編集段階で発言を削除したところがある。実際の A-I との対話は、本書に残ったものよりも冗長である。一定の編集を私は本書にまとめる過程で加えたが、A-I 吉見くんの発言の趣旨は、変えずに残したものである。

さらに、ここで強調しておきたいのは、A-I の返答に再現性がないことである。同じような問い合わせを仕掛けても、A-I 吉見くんの反応は微妙に変化し、異なる発想の返答を返していくことがある。ややネタバレになるが、一番困ったのは、第三章で東京の心的な吸引力を論じた際、A-I 吉見くんが最初に発したのは「非土着的な幻想性」という言葉であった。この言葉は、なかなか含蓄があり、議論を深めていくのに適しているので、私は A-I 吉見くんの返答に字数制限を加えてから、再びこの言葉を彼から引き出そうとした。ところが、散々工夫をしても、どうしても彼はこの言葉を二度と発さなかつたのである。A-I 吉見くんが、最初のやりとりで私に突つ込まれたのに憲りたのか、それとも単なる偶然なのか、理由はいまだにわからない。しかし、A-I の回答に再現性を持たせるのは容易ではないことを痛感させられた。

最後に、一連の対話実験による本書の目的が、必ずしも A-I とは何かを哲学的・言語論的、あるいはメディア史的に明らかにすることではないことを予告しておきたい。哲学的・言語論的には、A-I がいかなる意味で主体であり、また主体ではないのかが問題となる。本書の対話

で A.I. と私は対話、つまりコミュニケーションをしている。しかも、A.I. はそれなりの精度で私の発する文を解読し、返答を書く。この書く能力が、人間の知的能力の根幹であると長く考えられてきたため、A.I. の主体性が問われるのである。

他方、メディア史的には、A.I. が示すのは、人間の思考の機械的複製可能性である。写真、蓄音機、電話、映画、ラジオ、テレビと展開してきた一九世紀から二〇世紀にかけてのアナログ革命は、人間の視聴覚を機械的に複製可能にした。カメラやマイクを通じ、人の声や姿は必ずしもそこに実在する必要がなくなつた。二〇世紀末からのデジタル革命では、視聴覚のみならず、思考も機械的に複製可能なのではないかと思われてきているのである。こうした議論を深めることは可能であり、有益ではある。

だが、本書の主目的は、必ずしもそこにはない。本書の主目的は、もう少し教育方法論的なものだ。今日、大学教師の誰もが経験しているように、昨今の大学生は何でもすぐに自分のスマートフォンで検索し、それで「答え」にたどりつくと思い込んでいる。ここにはすでに A.I. も含まれ、多くの若者が、自分で考えることよりも A.I. に答えを教えてもらうことに流れている。そのほうが、速くて確実、つまり「タイプ（タイム・パフォーマンス）」がいいからだ。

こうした変化は全世界で起きており、人類は急速に自ら考えることを放棄し、そのやつかい

な作業をAIに委ねつつある。一九世紀の産業革命を経て手作業の能力が退化し、二〇世紀の視聴覚革命を経て微妙な色や音を見分ける能力も衰えていったように、二一世紀のAI革命を通じ、考える力も劣化していくことになる。おそらく人類は、この急速な退化のプロセスを止めることができない。私たちの社会生活に劇的なスピードでAIは浸透しつつあるし、教育現場も同じである。要するに、私たちはどんどん知性を失っているのだ。

しかしながら、教育の目的は、学生に自ら考えることを放棄させ、効率よくAIに答えさせることで身につけさせることでは断じてない。他方、すべての教育現場でAIを使用禁止にすることもできないだろう。では、どうすればいいのか？　その答えを本書で示したい。